

Title	キリストの復活をめぐって
Sub Title	On the resurrection of Christ
Author	坂口, 昂吉(Sakaguchi, Kokichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2007
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.75, No.2/3 (2007. 1) ,p.177(357)- 179(359)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究余滴
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20070100-0177

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

キリストの復活をめぐる

キリスト教の歴史の中で、復活が極めて重要な意義をもつのは言うまでもない。パウロは言う。「キリストが復活しなかったのなら、私たちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄である」(コリント1, 15-14)。キリストが十字架上の死去と埋葬の後、三日目に蘇ったことは、新約聖書および信仰宣言において主張されているキリスト教の基本的教えである。また弟子たちは、キリスト逮捕の時全員彼を捨てて逃げ去ったのに(マルコ14-50)、復活に接するや、エルサレムに再び集まってきた。実に復活は、聖霊降臨による教会設立の前提条件であったのである。

復活の祝日の起源は二世紀の半ばにさかのぼる。降誕の祝日がようやく四世紀半ばに成立したのとくらべれば、その伝統の古さと重要性がわかるであろう。二世紀半ば

キリストの復活をめぐる

坂口昂吉

といえ、キリスト教がローマ帝国内の諸都市に広まって、勢力を張ると同時に、迫害の嵐にさらされるに到った頃である。官憲の弾圧と共に、キリスト教徒を苦しめたのは、民衆の中に広まった中傷であった。キリスト教徒は、無神論者であり、近親相姦者であり、人食人種であると言われた。だがこのような民衆次元の邪推のほかに、教養ある哲学者による手厳しいキリスト教批判もあった。

その中でも最も古くかつ総合的な批判は、ケルソスという新プラトン派の哲学者が、一八〇年頃「真の教え」と題する書物で行ったものであった。この書物自体は失われたが、約七〇年後、教父オリゲネスが「ケルソス駁論」の中で詳細に反論したのでその大要がわかっている。ケルソスのキリスト教批判は、その信仰箇条を逐条的に

取り上げて追求し、特に復活信仰を厳しく批判している。ケルソスは言う。「神は世界を創造しなかつた。たとえ創造したにせよ、その場合にはもつと善い世界、即ち悪に墮落しない世界を創つたはずだ。またその世界が墮落したとしても、神はそれを放つておいたであらう。またかりに神が世界を救おうと考えたにせよ、そのための中心としてパレスティナのような片田舎を選ぶはずがなく、ましてイエスのような私生児を使って救いの業を行うはずがない。」ここに見られるケルソスの主張は、新約聖書をよく読み、またユダヤ人がキリスト教を中傷した文書にも眼を通したことがわかる。

さらにケルソスは、イエスの復活を否定して言う。「イエスは復活したと言われる。だが誰がそれを見たのか。ひとりの気狂い女と彼女に騙された数人の男ではないか。」ここでケルソスは、復活したイエスが、墓地の庭でマグダラのマリアに現れ、ついで使徒たちの前に出現した、という新約聖書の記述を利用している。またケルソスは、「キリスト教徒は、イエスがすでに生前から自分の復活を預言していたと言い、それ故死後その言葉通りに復活したのだ、と主張する。しかしこれは、弟子たちがこの預言なるものを、あとから記録の中に挿入し

たに過ぎない。このような文書偽造は容易に出来るはずである」と言う。

このキリストの復活を証明するために弟子たちが聖書の記録を偽造した、というケルソスの非難に対し、オリゲネスは反論した。「イエスの弟子たちは、自ら設けた虚偽のために殉教することがありえようか。しかも偽造者は文書の中に、自分たちにとって不利な記録を一切残さないはずだ。ところが新約聖書の中には、ユダの裏切りやペトロのキリスト否認のような、使徒たちにとって不利な記述が載っている。彼らは決して欺く人々ではなかつた。かりに彼ら自身が欺かれたことがあつたにせよ。」

この欺かれた使徒たちという仮説に対して、四世紀前半アレクサンドリアの司教アタナシウスが最後の止めを刺した。彼は証人の信憑性によつてではなく、教会の経験にてらして解答したのである。彼はその著作「御言葉の受肉について」の中で宣言する。「教会は今もなお世界の人々の生活を変革しつつある。この崇高な現象を生ぜしめている人が、死せるキリストなのであるうか。」

このような異教哲学者ケルソスに端を発する古代におけるキリスト復活否定論は、近代における聖書の自由主

義的批評家たちが提出した殆どの主張をすでに含んでいた。しかも古代の教父たちによってその否定論は退けられていたのである。